

そこに 学校があった 休廃校の歴史

興津中学校 (下)

平成以降に休廃校になった学校を中心に振り返ります。

200人超を頂点とする 生徒数推移の三つの山

新生興津中学校の歩みは、興津地区の新時代への歩みであり、そしてそれは、戦後日本の歩みそのものであった。生徒数の推移に目をやると、開校間もない1948(昭和23)年から1965年頃にかけて三つの山がある。いずれの山もその頂点は210人を超えている。ベビーブームや生活環境の改善、高度経済成長など、理由はさまざま考えられる。三つの山の中でも1956年の219人を頂点とした二つ目の山が興味深い。なぜなら、この4年前に画期的な農業資材および技術革新が興津地区にも導入され、生産効率が飛躍的に伸び始めた頃と重なるからである。それまで行われていたのは、油紙障子掛け栽培という「ペーパーハウス栽培」。そこに導入されたのは、ビニールフィルムによる「ビニールハウス栽培」である。生産効率の差は明白であった。



1968 (昭和43) 年2月に校歌制定された

全国を驚かせた卓球部！

さて、地区の活気は生徒たちの「勢い」に表れる。特筆すべき活躍がある。高度経済成長期後半の1971年、女子卓球部が県中学総体団体戦で優勝し、全国大会でもベスト8に入ったのである。その年から何と県で8連覇！さらに次の年も四国大会で好成績を上げ9年連続で全国大会へ進み、優秀賞を勝ち取った。これらの大活躍に至る「草分け」とも言える選手がいた。故・嶋内よし子さん。興津地区が輩出した全日本



1975 (昭和50) 年の
全国大会での女子卓球部 (開校記念誌より)

チャンピオンで、今も卓球界でその名は知られている。小さな海辺の町から出発し、卓球日本の頂点まで登りつめた、彼女の輝かしい足跡は今も色褪せることはない。

「興津全員逃げ切るぞ！」

興津中学校の生徒たちは、興津小学校同様に防災活動でもめざましい活躍を見せる。2004年に県の防災教育の指定を受け、その1年後に文部科学省から指定を受けた小学校とともに、地区の防災・減災に取り組んだ。年を追うごとに活動内容が広がり充実していく。これも小学校同様、京都大学防災研究所の協力と、生徒たちの「真っ直ぐさ」が活動を前へ前へと進めた。とりわけ、2015年からの活動には目を見張るものがある。避難路清掃、炊き出し訓練、避難呼びかけ標語制作、家具固定の演習・地域住民への呼びかけと作業支援、昭和南海地震の聞き取り、津波到達時間表示板制作と表示活動、多言語表示板の制作と表示活動、防災新聞の発行、他県中学校との交流、防災ミュージアム構想…。専門家からのアドバイスと生徒たちの発案は、まるで縦糸と横糸のようであり、さらにそれを支え導いたのは強い思いを持った教職員たちだったことは言うまでもない。



津波到達時間表示板の設置活動



多言語表示板

彼らは2018年、ぼうさい甲子園(参照:2025年12月号)において、グランプリを受賞した。これは「中学校の部」ではない。小・中・高・大学の全ての部門の中でのNo. 1であった。地域ぐるみで取り組んだことが評価されたというが、彼らが掲げたキャッチフレーズには「地域ぐるみ」という「よく耳にする言葉」では表現し切れない「具体的な危機感」と「地元・興津の人々への迫力ある愛」がある。そのキャッチフレーズとは、何と「興津全員逃げ切るぞ！」である。学校は閉校となったが、彼らの愛と熱意と迫力は、これからも地区全域に生き続けていくと信じてたい。

2021年3月、興津中学校の歴史はその幕を閉じた。そこにはいつも子どもたちがいた。そこに学校があった。(おわり)

町のうごき

(12月31日)	人	口	前月比	出生	死亡	転入	転出	
男	6,988	-13		男	1	13	8	9
女	7,542	-17		女	3	17	14	17
計	14,530	-30		計	4	30	22	26
世帯数	7,833	-13		(12月中の届出)				
窪川地域 10,384人 大正地域 1,998人 十和地域 2,148人								